

Consuegra



風車の町、コンスエグラ

マドリードからバスでおよそ2時間半南下すると見えてくる、広大なラ・マンチャの大地。ここに、人口およそ1万人のコンスエグラという町があります。この地域には、昔ながらの風情をよく保存している小さな町や村が点在しており、まさに400年前の文学『ドン・キホーテ』の舞台のよう。コンスエグラは丘に吹く風の下、風車の羽根の回転とともに、どのような歴史を刻んできたのでしょうか。今号特集では、中世の趣を漂わせるこの町の魅力をたっぷりとお伝えいたします。

TEXTO/FOTOS = Akio Morimoto



iegra, pueblo de molinos





ラ・マンチャの象徴とも呼べる三角帽子の白い風車。コンスエグラの風車は19世紀に町人たちの要望によって建設が始まり、何十年と長い時間をかけて、現在の12基が揃いました。最後まで産業用に活躍していたのは、1955年まで運転していた"Chispas"。現在では観光用に"Sancho"と"Rucio"の2つの風車を運転しています。"Sancho"は10月のサフラン祭りなど、町のお祭りやイベントの時だけ運転されます。"Rucio"は観光向けの風車で、冬季以外は土日を含む週5日、羽根を回しているところを見ることができます。

風車

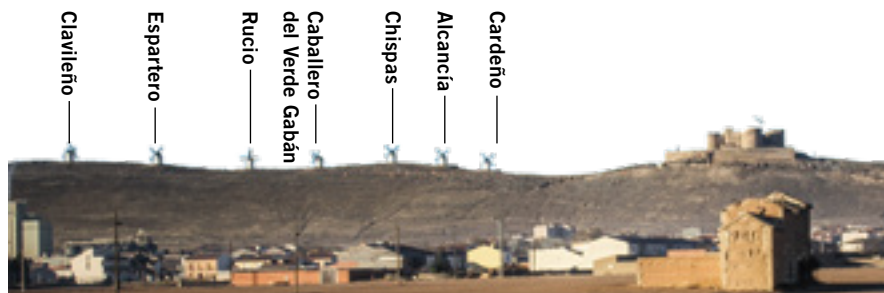
MOLINOS DE VIENTO



"Rucio"は運転日の10～14時と16～18時に帆を張って、小麦挽きを実演している

通常、風車には最初の所有者か最初の風車番(小麦を挽く人)の名前かあだ名が付けられる。コンスエグラの風車は『ドン・キホーテ』にちなんで名付けられたものが多い("Mambrino"はマンブリーノの兜、"Sancho"は従者サンチョ・パンサ、"Rucio"はサンチョの乗っていた口バの名)。風車"Chispas"(火花)の名前は、この風車の石臼が回転している時に火花がよく飛んでいたことに由来している

風車へのアクセスは、コンスエグラのバスターミナルから歩いて登って15分ほど。中世祭りとサフラン祭りの時のみ、バスターミナルから風車の丘まで臨時シャトルバスを運行している



Clavieño —

Espartero —

Rucio —

Caballero —
del Verde Gabán

Chispas —

Alcancía —

Cardeno —

いくつかの風車は現在、店舗や施設として活用されています。たとえば"Rucio"と"Mambrino"の1階はお土産屋、"Bolero"の1階はツーリストオフィスとなっており、それぞれ3階の風車内部の機械を見学できます。"Caballero del Verde Gabán"は風車全体がカフェになっており、1階が売店、2階が厨房、3階が座席。天井から突き出た巨大な歯車を頭上に仰ぎ見ながら、お茶を楽しめるユニークな空間です。



(上)"Caballero del Verde Gabán"の3階席。写真の料理は鹿肉のハンバーガーとコンスエグラらしくサフラン・ティー
(下)"Rucio"1階のお土産屋。可愛い風車グッズがずらりと並んでいる



(上)"Caballero del Verde Gabán"の3階
(下)同風車の1階。ここでカフェメニューを注文できる

風車番の仕事と風車の仕組み

コンスエグラの風車の目的は、小麦を挽いて、主食であるパンの材料である小麦粉を作ることです。風車番のおじさんが朝一番にすることは、風向きを調べることです。そのため3階にある小窓を全部開け、それぞれの窓の内側の棚になっているところに小麦をちらばし、2、3分放っておきます。そうすると風によって小麦が吹き飛ばされますので、一番きれいな棚のある窓の方向が、風の吹いてくる方向ということになります。

次に、風車の羽根を風の吹いてくる方向に向けさせます。実は三角帽子の風車の屋根は、羽

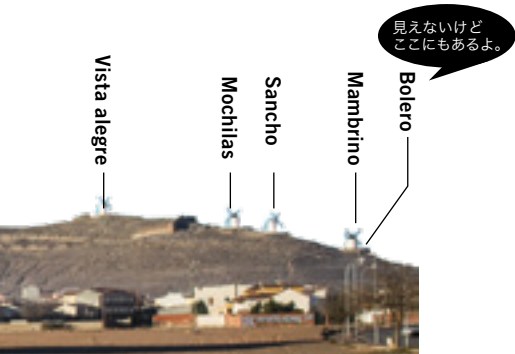
根とともに360度回転できるようになっています。風車の後ろに長い棒が付いていますが、これは羽根との重さのバランスを取るものではなく、この棒を回すことによって、屋根全体を回して、羽根を風が吹いてくる方向に向けるという仕組みになっています。

最後に、骨組みのような4枚の羽根に帆船のように布製の帆をかけて、準備万端となります。

風車番のおじさんは、小麦の詰まった40kgの袋を1階から3階まで担いで上っていきます。風車が回ると3階にある大きな歯車が回転し、これと小さな歯車を組み合わせることによって、垂直方向の力を水平方向に変えると共に、

回転速度を変え、石臼を回し、小麦を挽きます。できあがった小麦粉は、トイを伝わって下まで落ちていきます。

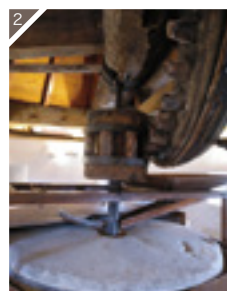
風車番のおじさんは、当然、風が吹かないと仕事なくなるので、怠け者でいつも呑んでくれていると評判が悪く、小麦を細かい小麦粉に挽くと容積がかなり減るため、小麦粉を少なく渡している印象を受け、泥棒だと呼ばれていました。一方、おかみさんの方は、周囲が畑で働く肌黒の女性ばかりの中、小麦粉のせいで、おしろいを塗ったように顔や腕が真っ白だったため、綺麗だと評判でした。



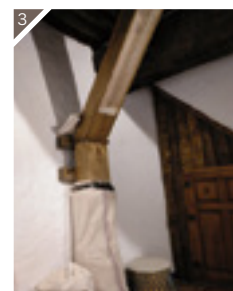
羽根の回転に連動して、3階の巨大な歯車が回り出す



連結している小さな歯車が石臼を水平方向に回転させ、小麦を挽く



挽かれた小麦粉はトイを伝わって下階の袋へと落ちていく





CASTILLO DE CONSUEGRA

コンスエグラはラ・マンチャを象徴する風車と城の素晴らしい風景が望める町として有名であり、スペイン観光には、欠かせないフォトスポットの1つです。その一方でコンスエグラ城に関しては、日本語の説明書がないということもあり、日本では、あまり詳しくは知られていないというのが残念な現実。そこで本誌でこの町を取り上げるのを機に、この城についてもご紹介いたします。ヨーロッパにある城というと、高貴な方々の豪華な大邸宅といったものが多い中、このコンスエグラ城はまさしく軍事上の要塞であり、素朴にして機能的なつくりになっています。

コンスエグラ城





支配の変遷を巡る歴史

スペインのあるイベリア半島は、711年から長きに渡ってイスラム帝国の支配を受けていました。現存する文書によると、10世紀頃のコンスエグラ城はイスラム帝国の要塞の1つだったと記されています。

もっともコンスエグラは、ローマ帝国の全盛期（1世紀頃）にその主要都市の1つであったため、城の起源はローマ帝国の要塞まで遡るのではないかという説もありますが、今のところそれを裏付けるものは何も見つかりません。

コンスエグラ城が最初に歴史のスポットライトを浴びるのは、1097年のコンスエグラの戦いです。当時の背景を簡単に説明すると、3つに分裂したイスラム帝国の1つ、後ウマイヤ朝が756年からイベリア半島を支配していましたが、1031年にはいくつかの小王国（タイファ）に分裂し、互いに争い弱体化していきます。その中で立ち上がったキリスト教諸国による国土回復運動（レコンキスタ）により、キリスト教国の1つであるカスティーリャ王国の王アルフォンソ6世が、1085年にトレドをイスラム教徒たちから奪還するとそこを首都に定め、タイファ諸国に迫ります。

これに対し、タイファ諸国の1つのセビーリャ王国は、北アフリカにあるイスラム教国の新興国ムラービト朝に助けを求めます。ところがこのムラービト朝がイベリア半島にやってくると、助けるどころかセビーリャ王国を征服し始めます。セビーリャ王は、ムラービト朝との戦いで戦死した息子の嫁ザイダ姫をアルフォンソ6世と再婚させ、コンスエグラ城を結納の引き出物に差し出すことで、逆にカスティーリャ王国に助けを求め危機を乗り越えようとしませんが、ついにはムラービト朝に滅ぼされてしまいます。

そして1097年8月、カスティーリャ王国とムラービト朝はコンスエグラで激突します。しかし、

兵器、兵力、戦術と全てに勝るムラービト朝の圧勝に終わりました。カスティーリャ王国に援軍にきた英雄エル・シッドの一人息子、ディエゴ・ロドリゲスは戦死し、アルフォンソ6世自身もコンスエグラ城に8日間に渡って包囲され絶体絶命となります。幸い、ムラービト朝軍が包囲を解いて撤退したため事なきを得ました。

その後80年もの間、コンスエグラ城はキリスト教国側の手からイスラム教国側へ、またイスラム教国側の手からキリスト教国側へと行ったり来たりを何度も繰り返した後、1172年にキリスト教国のカスティーリャ王国が奪還したのを最後に、イスラム教国側に渡ることはありませんでした。そして1183年、カスティーリャ王アルフォンソ8世は、外人部隊である聖ヨハネ騎士団にコンスエグラ城を譲渡し、この地域の守備と行政を任せます。聖ヨハネ騎士団はコンスエグラ城をその本部としました。この騎士団は、本来は聖地エルサレムで遠方からの巡礼者のお世話をする病院騎士団でしたが、十字軍の遠征により軍事騎士団になったのでした。その後1212年のナバス・トロサの戦いで、イスラム教国をラ・マンチャ地方から追い出すことで安定期を迎えます。

ところが、後年に起きた1813年のナポレオン戦争により、コンスエグラ城は大部分を破壊されてしまいます。その後1830年代における当時の首相メンディサバルの永代所有財産解放令により、城は聖ヨハネ騎士団から取り上げられ、民間に払い下げられました。やがて1962年にコンスエグラ市役所が城、風車を含めたカルデリコの丘全体を買取り、修復し、スペインの文化財として1980年半ばから内部の見学を可能にし、現在に至っています。

中世祭り

中世祭りの参加者。コンスエグラ場で見張るカスティーリャ王国の兵士たちを演じている



毎年8月半ばの週末に中世祭りを開催し、ムラービト朝との戦いで破れたディエゴ・ロドリゲスの死を追悼している

カスティーリャ王国と激突したイスラム教国の衣装を身にまとった人々





POTERNA

この観光者用の出入口は、お城の正門ではなく実は裏門で、ポテルナ (Poterna) と呼ばれます。小さくて見つけづらい場所にあり、城が落とされそうな時に脱出するための非常口です。また、不貞の目的で村へ脱け出すのに利用することもあり、「裏切りの門」とも呼ばれました。



TORRE ESTE

裏門に入り、アーチをくぐり、石段を上ると、城塞の中へ唯一アクセスできる東の塔の入口に出ます。城内に入るにはこの城の最も堅固な塔、東の塔を通らなければなりません。この塔の壁の厚さは、なんと5mもあります。

DENTRO DEL CASTILLO DE CONSUEGRA

中世の時代を遺すコンスエグラ城、その内部へと。



ESCUDO DEL PRIOR DE LA ORDEN JUAN JOSÉ DE AUSTRIA Y ESCUDO DE LOS ÁLVAREZ DE TOLEDO



ERMITA

資料室を通り抜け扉をくぐって石段を上っていくと、お城の礼拝堂に出ます。礼拝堂の広間は、1995年に当時のままに再建されました。建物の一番高い所に位置します。鉄格子で礼拝堂が分けられており、飾り壁がありました。1584年にこの飾り壁が作られたことが判明しており、礼拝堂はそれより前に建てられたことになります。この広間の再建が城の最後の大改装で、1229年に建設された古い礼拝堂の代わりとなりました。中世の城、特に聖ヨハネ騎士団のような軍事騎士団に所属する城の中に礼拝堂を設けるのはごく当たり前のことでした。

塔を通る前に、入口の上にある2つの盾の存在に気が付くはず。聖ヨハネ騎士団本部の修道院長の紋章です。上の紋章は、ドン・ファン・デ・アウストリア修道院長の盾です。上側に王冠、下側に貝で仕上げられたハプスブルグ家のエンブレムの下に8つの頂点を持つ聖ヨハネの十字があらわれています。ドン・ファン・デ・アウストリア修道院長 (1629-1679) は、国王フェリペ4世と女優のマリア・カルデロンとの子で、1642年5月に国王の息子として認知され、1643年には聖ヨハネ騎士団の騎士に叙任され、コンスエグラにあった騎士団本部の修道院長になりました。下の紋章は、ロス・アルバレス・デ・トレド修道院長の盾です。イスラムの8つの旗に囲まれています。旗の先端が下向きになっており、降伏を意味しています。



SALA DE ARCHIVOS DE LA ORDEN

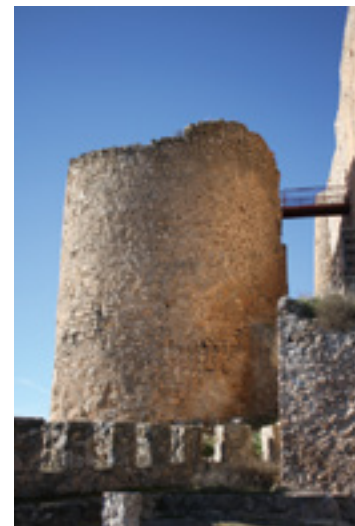
台所の跡より、後ろを振り向くと石段があり、それを上って橋を渡ると東の塔の上階の入口になります。聖ヨハネ騎士団の資料室で、そこには、それぞれ3つの鍵のついた2つの扉があり、これらの鍵は、聖ヨハネ騎士団の3人の重要な高官たちだけによって管理されていました。資料室には、聖ヨハネ騎士団の規律に関する文書のほか、施された寄付の記録文書、恩賞地における特権、騎士たち、宗教関係者たちによって提出された証書、そして教会・修道会の特権の写本がありましたが、残念なことに19世紀初めのフランス軍とのナポレオン戦争の際、ほとんどが燃やされるか略奪されてしまいました。

東の塔に入り、右手の階段を上がってすぐ左折すると、暗い廊下が続く、その終端に貯水槽があります。乾燥したラ・マンチャ地方において飲料水、生活用水の確保は何よりも重要なことです。したがって、この貯水槽は大きく、床の大きさは8m×4.8m、高さは最も高いところで5.4mあり、207.36ℓの容量を持ちます。天井は半円形で、真ん中の正方形の穴が水の入口と出口を兼ねています。そして4つの小さな穴があり、換気のための通気口になっています。壁は石灰、砂、酸化鉄、赤土粘土、天然樹脂を成分とした赤い漆喰で覆われていて、防水効果と、水が腐るのを防ぐ効果があります。底に空っぽにするための排水溝、また、余った水を排泄するための余水路を備えています。貯水槽を地下に置くことで、水の蒸発を防ぎ、水温を一定に保ちます。

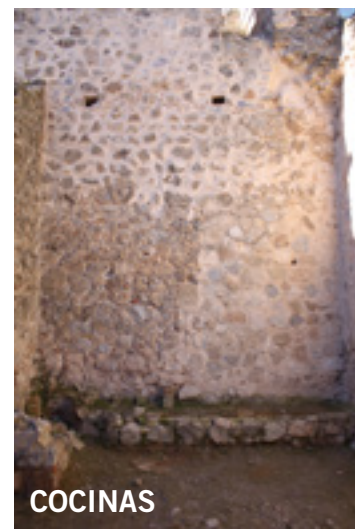


ALJIBE

TORRE ALBARRANA



礼拝堂を正面へ進んでいくと、左手に扉があり、これを出ると橋があり、アルバラナの塔と結ばれています。この塔は城全体の南に位置し、高さが25mあります。ヒスパニック＝イスラムの軍事建築に特有なもので、当時(12世紀末～13世紀初め)のキリスト教徒の要塞に順応させたものです。城が陥落しそうな時に城主が礼拝堂より橋を渡ってこの塔に避難し、橋を取り壊すことで、外からのアクセスを遮断し、城主の安全を確保するという狙いがありました。塔の内部は直径4mの木造4階建てになっています。異なる階へは壁に面した螺旋階段で移動しました。下の階の壁には、敵に矢を放つための狭間、銃眼が付いています。これは縦に細い小さな開口部で、内側になるにつれて広がっています。



COCINAS

長い廊下の入口に戻り、左手へと東の塔を出ながら、階段を上っていくと突き当たりが台所の跡です。おそらく鍋が置かれたであろう戸で構成されています。網焼きのためのいくつかの小さな囲炉裏、調理道具の置き場もありました。

コンスエグラ城の麓に佇む中世祭りの参加者たち



Escudo heráldico del apellido Cervantes セルバンテス家の紋章



ベルテデーラ通りの住宅地の一角にある、16世紀頃コンスエグラの名士であったセルバンテス家の鹿の家紋入り石盾です。当時この地にセルバンテスの姓を持った家族がいくつかあったことが窺えます。

C/ Vertedera baja, 2

San Rafael サン・ラファエル教会



カスティージャ地方でよく見られたムデハル様式の建築物で、町の中心インパルシアル地区に位置します。1891年、町を襲った洪水により市街地が破壊された後に再建されました。

Plaza Madrid, 5

Palacio Prioral y Casa de la Tercia 大司教の邸宅・テルシアの家



かつては、聖ヨハネ騎士団の大修道院長の邸宅となっていた建物。古代ローマの浴場の上に建てられています。アプス(教会の後陣)、住居、塔の3つの要素で構成されています。

C/ Plus Ultra, 7

町のモニュメント CONSUEGRA MONUMENTOS

風車群と城が並ぶ丘を下り、コンスエグラの街中を覗いてみましょう。中世の光景をそのまま残す旧市街には、歴史的にも重要な意味を持つモニュメントが数多く保存されています。

地図: MTN25 1994-2017 CC-BY 4.0 ign.es

Madres de la Inmaculada Concepción マドレス・デ・ラ・インマクラダ・コンセプシオン修道院



ゴシック様式とムデハル様式が見事に調和した希有な建築です。

C/ Eulogio Merchán, esquina con C/ Santiago Rusiñol

Corredores 回廊(博物館)

木製のバルコニーと柱廊が目立つ17世紀の建造物。中は博物館になっており、石器時代から19世紀までの考古学的な発見物が展示されています。

Plaza España



Alfar エル・アルファル(製陶所)

1970年代まで実際に陶器の焼き場として使用されていた、伝統的な様式の製陶所。中には、ローマ時代のかまどが2つ保存されています。

C/ Rosa del Azafran, 8



Ayuntamiento 市庁舎

1670年建設。石塀の上のレンガ壁の真ん中に大きくはめ込まれた石が特徴的なトレドでよく見られる建設様式です。丸いアーチと時計台は、後から建てられたものです。

Plaza España, 1



Edificio escolar "San Gumersindo" サン・グメルシンド校舎

20世紀の初頭に建てられたカステリャーノ＝ムデハル様式の歴史的建造物です。

Plaza España



Presa Romana ローマ時代のダム

コンスエグラから南西に約4kmのところにある世界で一番長い638mのローマ時代のダム遺跡です。ダムの中心部は14の控壁に支えられ、放水路も付いています。

junto al Río Amarguillo





サフラン祭り

1963年より、毎年10月の最後の週末に、サフランの収穫に合わせて開催しています。

コンスエグラおよびラ・マンチャ地方のサフラン栽培は、中世の頃に中東から伝来しました。花からサフランを採るにはまず、雌しべを採ります。そして、雌しべを火であぶって乾かすと香辛料サフランのできあがりです。スペイン名物バエーリャには欠かせません。サフラン1kgの値段はなんと5,000～7,000€。サフランが「赤い金(きん)」とも呼ばれる所以です。サフラン1kgを得るには、約250,000本ものサフランの花が必要です。

催し物としては、サフランの雌しべ採り競争や、郷土料理コンテスト、スペイン各地域の民俗舞踊などを楽しむことができます。

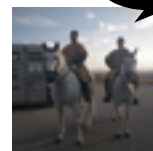


雌しべ採り大会の様子。100本の花の雌しべを採る時間で競われる。採り方が汚いとペナルティ。優勝者はおおよそ5分以内に100本の花の雌しべを採り終える。1本あたり3秒未満の計算だ

EVENTOS Y COMIDAS

町の人たちが大切にしている伝統行事、郷土料理

中世祭り！



GASTRONOMÍA

コンスエグラで気軽に楽しめるグルメをご紹介します！

マサパン

Mazapanes



安価で高品質な名物マサパン

トレドの銘菓といえば、ココアとアーモンドをベースにしたマサパンが有名だが、コンスエグラ市もトレド県に属しており、その銘菓は同じくマサパンであることは、実はあまり知られていない。そのため、トレドのマサパンと変わらない品質ながら低価格で購入できる。中でも1915年から家族経営で創業し、高品質の原材料を使ったマサパンを提供している“Los Peces”は評判の店。地元の人だけでなく、ここマサパンを味わうためにコンスエグラを訪れるお客で賑わっている。

Los Peces

C/de San Juan Bautista de La Salle,
45700 Consuegra, Toledo
TEL: +34 925 480 059
WEB: www.mazapanespeces.com

ラマンチャ・チーズ

Queso manchego



セサルチーズ工場での
ラマンチャ・チーズの試食

現場での豊富な経験を持つ職人によるプレゼンテーションを通じて、羊の乳を使った手作りチーズの作り方、ケア、保存の仕方など、ラマンチャ・チーズの世界を堪能できる。試食時には、チーズだけではなく、ラマンチャ・ワインまたは地ビールなどの飲料との相性も含めて、食べ比べることができる。

見学時間: 2時間
見学料: 18€ / 1人(要事前予約)

Quesos César

Carretera Comarcal CM-4133 Km 1,
45700 Consuegra, Toledo
TEL: +34 925 480 387
WEB: www.quesoscesar.com

タパス料理

Tapas modernas



独創的なタパス料理を作る
地元でも評判のレストラン

外観はどこにでもあるバルだが、内部はワイン蔵のような洞窟になっている。礼儀正しく、知識豊富なスタッフたちが迎えてくれる。タパスを食べるカウンターと、料理を食べるレストラン席とで分かれているので、気軽につまみに行っても、ゆっくりディナーを楽しんでもいい。創意工夫されたメニューはすでにスペイン料理を食べ慣れた観光客でも楽しめる。味もサービスも一流。

(上) レモンシャーベット、タコ、スイカ、赤ピーマン、レタスのサラダ
(下) オックステール(牛のしっぽ)。臭みがなく食べやすい

Tapería Gaudy

C/ Plus Ultra 7, 45700 Consuegra, Toledo
TEL: +34 722 402 600

森本晃生

Akio Morimoto

1993年よりスペイン在住。
2003年ラ・マンチャ地方に移る。2016年1月から11月まで、カンボ・デ・クリプターナ市観光局に勤務。2017年10月から2018年4月まで、コンスエグラ市観光局に勤務。主夫業の傍ら、現在住むラマンチャの魅力をWEBなどを通して発信している(www.lamanchainfo.es)

コンスエグラ市観光局

[@consuegra.jp](https://www.facebook.com/consuegra.jp)